慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東奥義塾を巡るいくつかの「接続」
Sub Title	"Connections" involving the history of To-o-gijuku during the early Meiji period
Author	北原, かな子(Kitahara, Kanako)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2014
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.31, (2014.) ,p.23- 43
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 近代日本の中等教育 論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20140000-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十一巻（二〇一四年）
特集　近代日本の中等教育

東奥義塾を巡るいくつかの「接続」

北原　かな子

はじめに

東奥義塾は、明治五年（一八七二）に津軽地方弘前に開校した私学である。財政難から明治三四年（一九〇一）に弘前市に移管され、明治末期に一度廃校となったが、大正一一年（一九二二）にキリスト教主義学校として再興され、現在に至る。東奥義塾は、旧藩学校稽古館の名前こそ受け継がなかったものの、藩校との連続性を常に意識されていた。現在の東奥義塾高等学校も開学を明治五年とするものの、その源を稽古館におくとして、学校史は寛政年間の弘前藩学校設立から記述が始まる。近世から近代へと移り変わる中で弘前藩の旧藩学校を継承した中等教育機関であり、名前が示す通り、その設立時に慶應義塾の影響を強く受けた学校でもあった。

本稿では、①東奥義塾開学までの「接続」、②東奥義塾開学後の「接続」について述べることで、津軽地方

の中心的な教育機関として存在した私学校東奥義塾を巡るさまざまな接続性について考えてみたい。

1　東奥義塾開学までの「接続」――藩学校から近代の私学校へ――

（一）　東奥義塾前史

弘前藩に藩学校が開かれたのは、寛政八年（一七九六）のことである。[1] 幕末に近づくにつれ医学および軍備の必要性を感じた同藩では、安政六年（一八五九）、弘前藩学問所（稽古館）内に「蘭学堂」を設置し、洋学を取り入れるようになった。[2] 一方、若い藩士を遊学のために江戸や先進的諸藩に送り、勉学の道を開いた。藩士が進学した先の学校は多岐にわたるが、中には福沢塾も含まれており、弘前藩と慶應義塾の関係はこの頃から始まった。

幕末期に弘前藩から他藩および江戸その他の学塾に学んだ人物と経緯については、坂井達朗氏の研究に詳しい。[3] 坂井氏は弘前藩の江戸藩邸がつけていた「江戸日記」を資料として、特に慶應義塾に学んだ人々について明らかにするとともに、①入社の時期から判断して、弘前藩から慶應義塾で学ぶ人々の背景に藩の政策意図があったのではないかということ、[4] ②慶應義塾で学んだ人々の中に弘前藩の有力者が多く、こうしたつながりを通して福沢の思想的影響がこの地に広がったことなどを指摘している。

実際、坂井氏によってリストアップされた中には、明治二年（一八六九）に国元に帰り、英学の必要性を説いて回ったとされる吉崎豊作、明治四年（一八七一）に弘前藩の学則を改定して開校した青森英学校の監督となった佐藤弥六、東奥義塾開学およびその後の経営の中心となった菊池九郎、東奥義塾開学時に外国人教師招

聘に動いたと見受けられる成田五十穂、東奥義塾開学時の教授陣の一人となった寺井純司など、津軽地方における教育事業の主力を担った人々が入っている。こうして弘前藩出身で同塾において学んだ人たちの存在だけではなく、弘前藩では慶應義塾から教師を招聘することで、その関係はさらに深まった。

明治四年（一八七一）一月、弘前藩は学校改革の一環として、弘前に皇漢英の三学科を教授する敬応書院、青森に英学校の二校を寄宿寮付きで開校した。[5] 開校に際し、青森英学校の監督を任ぜられた佐藤弥六は、藩主津軽承昭の告諭を代読した。遠路教師を招聘して教育を依頼したのであるから「他郷へ勤学ノ心得ニテ」学ぶようにとの内容である。この時招聘された教師は四名。静岡藩から宮崎立元、嶋田徳太郎の二名、そして慶應義塾から、永嶋貞次郎、吉川泰次郎の二名だった。これらの教師たちには、宮崎・嶋田の両名に月給五〇両と支度金一〇〇両、また、慶應義塾からの二人には、吉川に七〇両、永嶋には一〇〇両の給与が支払われ、きわめて手厚い待遇がなされた。ただし、開校から半年ほどすぎた明治四年（一八七一）七月の廃藩置県およびその影響による財政難で、慶應から招聘された教師たちが教鞭をとった青森英学校は閉鎖し、弘前の敬応書院に統合された。この段階で敬応書院の寄宿寮も廃止、さらに敬応書院自体も閉鎖となり、学校は漢学（弘前城内三の廓）と英学（大導寺族之助邸および津軽廷尉邸）にわかれて教育が継続された。『菊池九郎先生小伝』によると、この時期は士族の子弟だけではなく、平民の子弟も志願者は就学を許されたとなっているが、[6] 実際、同年一〇月には、次のような告示が出された。[7]

比度漢英両校ニ於テ寄宿生通学生共四民之隔ナク人材御教育被申付候間入学致
度族ハ来ル十一月朔日迄学校へ願出候様被申付候事

一、寄宿生之義ハ学業検試之上可被申付候事
一、漢学生之義ハ素読書卒業之族者本校へ通学可被申付候
一、素読生之儀ハ素読堂へ通学被申付候事
一、漢学素読生之義ハ願書名前上へ素読ト相認候様
一、入学被差許候族者多少不拘入校之節諸務局へ東脩可相納事（以下略）

この「四民之隔ナク」の方針は、そのまま「四民の子弟をして」との表現で、後の東奥義塾開学時の申請書にも記載された。[8]

続く明治五年（一八七二）五月には、漢学及び英学の両校合同の議が起こり、弘前漢英学校として新たに開校された。[9] しかしそれも束の間の事で、わずか三ヶ月後の学制発布により、同校は県庁の保護を受けることができなくなり、新たな危機に直面した。ほとんど壊滅に瀕した状況の中で、藩学の系統を受け継ぐ学校として構想されたのが、東奥義塾だった。中心となったのは、慶應義塾に学んだ菊池九郎である。菊池は、同じく慶應義塾同窓の成田五十穂、慶應から招聘されてきていた吉川泰次郎、そして、弘前藩で和洋両学に通じた学者として知られ、弘前藩学校稽古館最後の督学（学校長）であった兼松成言と共に私立学校創立を企画した。明治五年（一八七二）一一月一七日に県庁に申請し、文部省から許可が下りたのは、同月二三日のことだった。この申請は成田五十穂と吉川泰次郎の名前で行われている。[10] 開校に際しては、旧藩主津軽承昭から五〇〇〇円という多額の資金援助が寄せられた。旧藩主津軽承昭は、東奥義塾に対して明治九年（一八七六）五月二四日

に奨学の書も送っており、物心両面からの援助を与えた。

（二）東奥義塾開学

こうして開学した東奥義塾は、塾則からカリキュラムまで、慶應義塾の体制にその範をとった。たとえば、明治六年（一八七三）二月の東奥義塾塾則は、次のようになっている。

「入社ノ規則」（第一章―第十二章）
「入塾ノ規則」（第一章―第六章）
「塾中ノ規則」（第一章―第三十三章）
「書籍出納掛ノ規則」（第一章―第五章）
「会計局ノ規則」（第一章―第六章）
「病室ノ規則」（第一章―第六章）
「塾僕ノ規則」（第一章―第十一章）

これは、慶應義塾によって明治四年版行頒布された『慶應義塾社中之約束』[11]の中の規則関係ときわめて類似している。[12] 特に、「入塾」と「入社」を明確に区別しているのは、この時期の東奥義塾の特徴であり、明らかに慶應義塾の影響を示すものである。こうした背景には、言うまでもないことながら、東奥義塾開学に至るまでの主要な役割を果たした人物たちが慶應義塾で学び、福沢の影響を受けていたことが大きな理由と思われる。

中でも菊池は学校組織の構想からその後の経営までを一手に担い、「東奥義塾の創意者」と称された。東奥義塾は、私学としてのスタートを切ったが、藩校を継承した学校であることから地方の中等教育の中心であり、それ故に県庁からは、公立にしようとの画策があったことを、藩主津軽承昭の伝記が伝えている。[13] 特に同校は後述のように外国人宣教師を教師として雇用したことからキリスト教及び自由民権運動の拠点となり、明治一四年（一八八一）から一五年（一八八二）にかけて政府の弾圧を受けることとなったが、その時点でも経営者の菊池は「私学」の方針を貫いた。[14]

菊池がなぜ東奥義塾を私学にすることにこだわったか、そのこと自体については、彼は明確にしていない。ただ、菊池は自身の教育観を述べる中で、中等教育に関して、国家は方向性を示すにとどめ、教育の詳細は私立学校に任せるべきとの信念を明らかにしている。特に明治三三年の「教育界の根本的革新」において菊池は、教育本来の目的とは「精神的自由教育の旗幟を擁して人物の養成を期す」ことであり、育英事業は自由な私学教育によるべきであると主張している。[15]

菊池がこうした考えを持つにいたった背景として、慶應義塾および福沢の影響を想定するのは一つの考えになると思われる。彼は東奥義塾の学校としての体制を作る上で範としたのは慶應義塾だったが、その根本的な方向性も慶應義塾の影響を受けた可能性は否定できないのである。

ここまで述べてきたように、開学時の東奥義塾は、事実上慶應義塾と接続していた。さらに、東奥義塾は、近世までの藩学としての教育機関から近代的中等教育機関へと接続を示す存在でもあった。[16] この二つの「接続」はそれぞれ独自のものというよりは、一体化していた。慶應義塾から地方の中等教育機関への「接続」があり、それがさらに弘前での近世型藩学校から近代型学校への「接続」を可能にしたのである。しかし、慶應義塾と

地方の中等教育としての東奥義塾との接続は、徐々に薄れて行くことになった。その発端となったのが、開学時の方針で草創期東奥義塾教育の中核となる「洋学教師」の存在だった。

2　東奥義塾開学後の「接続」――海外教育機関とのかかわりへ――

（一）　開学時の方針と外国人教師

東奥義塾は開学に際して洋学受容を教育の柱とし、旧藩主津軽承昭からの補助金の大半を割いて、外国人教師を雇用した。最初の外国人教師チャールズ・H・H・ウォルフ[17]の人選にあたったと見受けられるのは、これまでもたびたび名前がでてきた、慶應義塾出身の成田五十穂だった。オランダ改革派宣教師だったウォルフは、在職中に書いた書簡の中で相談相手として成田および吉川の名前を挙げている[18]。またさらにウォルフの書翰によると、東奥義塾ではキリスト教宣教師雇用を望んでいたらしい[19]。ウォルフが任期満了で弘前を離れた後、後任として東奥義塾に着任したのはアーサー・C・マックレー[20]だった。マックレー自身は宣教師ではなかったが、メソジスト派宣教師ロバート・S・マックレーの次男だった。そしてさらにその後任となったのは、メソジスト派宣教師ジョン・イング[21]である。

イングは、イリノイ州出身で、一度軍隊に入って大尉となった後、アメリカ、インディアナ州にメソジスト派によって設立されたインディアナ・アズベリー大学に入学した。在学中の成績はきわめて優秀で、同大学が最初に東洋伝道に三人送り出した中の一人に入っている。四年間にわたる中国伝道からの帰国途中、日本に立ち寄ったところに、東奥義塾の教師を探していた学校関係者と出会い、後に日本メソジスト派の重鎮となる弘

前出身の本多庸一と共に弘前にやって来た。本多は、弘前藩きっての秀才とうたわれた人物で、明治五年（一八七二）に横浜でバラから最初に洗礼を受けた中の一人であった。イングは、在職期間も明治七年（一八七四）末から明治一一年（一八七八）三月までと草創期の五人の中ではもっとも長く、東奥義塾のその後の方向性を決定づけ、その貢献が今に至るまで弘前で語り継がれるほどの影響力を残した。

（二）ジョン・イングの貢献1――徹底した英語教育

イングは東奥義塾在職中、自らの母校であったインディアナ・アズベリー大学の教育内容をもとに教育に取り組んだ。イングの貢献の詳細については、拙著『洋学受容と地方の近代―津軽東奥義塾を中心に―』（岩田書院、二〇〇〇）で述べたので、詳しくはそちらを参照されたい。ここでは、主に彼の教育内容と海外留学生の派遣について述べる。

イングは東奥義塾に着任してから、教育内容を自らのやり方に則して改変した。メゾジスト本部への報告の中でも、母国の学校と同じ教科書を使用するなど、可能な限り自分たちのやり方で教育内容を構成したことを述べている。[22] それはすなわち、慶應義塾に範を取る形で始まった東奥義塾の教育システムが変容していったことを意味した。

東奥義塾が開学した時点でのカリキュラムは、基本的には文部省で定めた「小学教則」及び「外国教師ニテ教授スル中学教則」を参考にしている。ただ上級になるに従って、数学の比重が大きくなっており、それは慶應義塾が三田に移って間もない明治五年（一八七二）に改訂された「科業表」が数学と各教科を別格に扱ったことと共通する。[23] しかし、イングの在職を経て打ち出された明治一一年（一八七八）時点のカリキュラムはか

なり変更され、少なくとも数学だけを特別扱いすることはなくなった。その数学については、算術、代数、幾何、三角法と進むプロセスがイングの母校インディアナ・アズベリー大学と同じであることに加え、現在確認できる限り、使用している教科書もインディアナ・アズベリー大学と共通しているものが多かった。[24] 数学以外の教科についても同様で、当時のインディアナ・アズベリー大学便覧に掲載された教科書と同じ書籍が多く現在まで残されている。慶應義塾の影響下から始まった東奥義塾を、イングは文字通りアメリカの中等教育機関に近い形に変えて行ったのである。さらにイングは東奥義塾の通常の課業に加え、希望者にギリシャ語やラテン語など、インディアナ・アズベリー大学の入学試験に必要な科目も教授した。

その他にもイングは、当時のアメリカの大学で行われていたリテラリィ・ソサエティ（Literary Society）という組織形態やその考え方を東奥義塾の人々に伝えた。[25] これは、スピーチ方法や文章の書き方、討論の仕方を鍛錬するもので、東奥義塾においては、文字通りの直訳で「文学社会」組織として導入された。ここで行われた英文暗唱やディベートなどの諸活動により、東奥義塾生はみるみる英語力を強化して行った。イング在職中の東奥義塾は、校内のいたるところで、生徒たちが競うようにして英文暗唱を練習していたという。[26] 東奥義塾の生徒たちは、英語によるイングの授業に加え、課外活動的な英語学習により、高い英語力を身につけるようになって行った。

（三）　イングの貢献2——海外留学生の派遣

こうして育てた東奥義塾生たちに、イングは海外で学ぶ道を開いた。弘前藩の中で海外留学への道がどのように模索されていたのかについては、前出の坂井達朗氏の研究に詳しいのでそちらを参照されたい。

イングは母校の教授と連絡を取り、日本からの留学生受け入れを打診すると共に、東奥義塾においては、インディアナ・アズベリー大学の入試を念頭に置いた受験指導を行った。前述のギリシャ語やラテン語の教授はその一環である。そして、明治一〇年（一八七七）七月二日、弘前から四人の東奥義塾生がアメリカ、インディアナ州グリーンキャッスルのインディアナ・アズベリー大学に向けて出発した。留学生たちは八月二一日に現地到着、九月一〇、一一日には、インディアナ・アズベリー大学の入試を受験した。その受験科目は以下の通りである。

Latin—Latin Grammar, Caesar's Commentaries, Virgil's Aeneid, Latin Prose Composition.
Greek—First Book in Greek, Greek Grammar, Xenophon's Anabasis, Exercises in Greek Prose Composition.
Mathematics—Higher Arithmetic completed, and Algebra.
English—English Grammar, Test Spelling, Composition, Book—keeping, and, Drawing.
Natural Science—Physiology, Natural History, Elements of Natural Philosophy, Physical Geography, and Geography of the Heavens.[27]

これらの科目と同じタイトルを持つ書籍が現在も東奥義塾に残されていることから、受験生たちはすでに日本にいた頃に入試を念頭に置いた勉強をしていたものと察せられる。それはそのまま、当時の東奥義塾のカリキュラムに入っていた教科でもあった。

留学生たちは現地到着直後にも関わらずきわめて良い成績で入学試験を通過し、大学入学の年齢に達してい

た川村敬三、珍田捨己、佐藤愛麿の三人は大学一年の課程に、年少の那須泉は予備課程に入学した。在学中の活躍の様子は、今も同大学の記録に残る。彼らはそれぞれ、優秀賞を数々獲得し、卒業のセレモニーでも選出されてスピーチを行った。大学内で初めて行われた「リテラリィ・ソサエティ」対抗弁論大会でも、日本人である佐藤愛麿が所属していたフィロロジカル・ソサエティ（Philological Society）から選出されて出場し、強敵をおさえて優勝を飾った。その他にも彼らの優秀な成績や努力を物語るエピソードには事欠かない。これについては、拙著をご覧いただきたい。[28] 次に、彼らがもたらした次の接続について述べて行きたい。

（四）教師と留学生の交流

明治一〇年（一八七七）夏にインディアナ・アズベリー大学に留学生を送り出した後の翌年三月、イングは帰国の途についた。後任として着任したのは、イングの後輩であるウイリアム・C・デヴィソン[29]である。東奥義塾草創期資料である「東奥義塾一覧」によると、彼の来日の動機はイングの紹介によるものだった。年代的には、イングはインディアナ・アズベリー大学一八六八年の卒業、またデヴィソンは一八七七年の卒業で、在学中の直接の接触はなかったと思われる。ただし、これまで何度か述べたように、この当時同大学には、リテラリィ・ソサエティがあった。弁論術などを磨く団体だったこのソサエティは、一種のサークル的なもので、学内にいくつもの団体があり、共同で月刊の機関誌である「アズベリー・レビュー紙」（*The Asbury Review*）を出していた。この中には卒業生の活躍を特集するページもあり、東洋で活躍するジョン・イングは度々登場した。そしてイングが弘前で活動していた明治九年（一八七六）当時のアズベリー・レビュー紙の編集は、デヴィソンが担当しており、彼はもともとイングの活躍を知る立場にいた。

たとえば、イングが恩師に宛てて留学生受け入れを打診したときの書簡は、「これらの留学生たちがミッションの仕事の新天地を開くだろう」との紹介文[30]とともに、アズベリー・レビュー紙に紹介されている。このときの編集担当もデヴィソンだった。デヴィソンが自分の編集の仕事を通して知ったイングの活躍に関心を持ち、イングの紹介により日本に行く決意をしても不思議ではない。東奥義塾の教育はイングからデヴィソンへとバトンが渡され、インディアナ・アズベリー大学の影響もさらに続くことになった。

デヴィソンが東奥義塾を離れた後に着任したのも、やはりインディアナ・アズベリー大学出身のロバート・フロイト・カール[31]だった。メソジストエピスコパル教会の年報によると、メソジスト派のメンバーであったカールが東奥義塾に来たのは、「学校［東奥義塾］の日本人のディレクターたちの申し出を受け入れて」[32]となっている。カール自身がつけていた自分自身の活動記録[33]によると、契約の合意が成立したのは明治一二年（一八七九）二月のことであり、翌三月には東奥義塾からの契約書を受け取り、彼はそれに署名している。契約交渉は明らかにアメリカで行われていることから、直接その任に当たったのは、当時インディアナ・アズベリー大学に在学した珍田捨己、佐藤愛麿、川村敬三たちであると考えられる。また、カールは前任者のデヴィソンと共に、一八七六年初めに前述のアズベリー・レビュー紙の編集を担当した時期があり、やはりイングの活動などにも関心を持っていた可能性は十分に想定される。

こうしてインディアナ・アズベリー大学からの教師が続く一方で、同大学に学んだ留学生たちも東奥義塾とインディアナ・アズベリー大学とのつながりを強めるのに一役買った。明治一四年（一八八一）に珍田捨己、佐藤愛麿、川村敬三の三人が卒業し、さらに二年後に年少だった那須泉も学業を修めて帰国した。そのうち、川村は病となり帰国直後に亡くなったが、珍田捨己は故郷に帰り、東奥義塾の教員となった。かつて津軽から

送り出され、慶應義塾で学んだ人たちが東奥義塾で教鞭をとったように、珍田もインディアナ・アズベリー出身教師として母校で教えたのである。舶来の英語を駆使する珍田の授業は若い学生たちの向学心を惹き付け、東奥義塾には留学の途を求める生徒が学びにくるようになった。そして、明治一八年（一八八五）には笹森卯一郎、益子恵之助、高杉栄次郎がデポー大学に進学した。このデポー大学とは、インディアナ・アズベリー大学が名称変更したものである。続いて高杉の弟である高杉滝蔵、高杉良弘もデポー大学に留学した。さらに笹森の弟である笹森順造も後にデポー大学ではないが、アメリカに留学している。近代型私学校となった東奥義塾は、明治一〇年代において、アメリカの高等教育機関への接続が可能な学校となっていったのである。

（五）留学生の帰国後——那須泉を中心に

東奥義塾からインディアナ・アズベリー大学（現・デポー大学）に進学した留学生たちは、佐藤愛麿が帰国後に、現在の青山学院大学の前身校である「美会神学校」に勤務した。しかし、わずか一ヶ月の後に離職し、外務省入りした。その後は着実に其の地位を固めて、大正五年（一九一六）に駐米大使を務めるなど、国際関係で活躍した。また珍田捨己は、前述のように東奥義塾で教鞭をとった後、やはり外務省入りし、各地の領事や大使などを歴任した後、最後は侍従長になった。川村は、母校東奥義塾に戻り教育職につく希望をもっていたものの、体調を崩して早世したため、それはかなわなかった。

ここで最初の留学生の一人である那須泉について少し述べておきたい。那須は他の三人に比べて年少だったため、予備課程を経てインディアナ・アズベリー大学に進学した。きわめて高い英語力や学力は現地の新聞にたびたび報じられ、友人たちからも高い評価を得ていた[34]。ただ、体調を崩したことから、時々休学を余儀なく

され、体調が落ち着いた一八八三年四月に、卒業目前にして帰国の途についた。その後、那須は東京師範学校に奉職した。その活動の一端は、現在の筑波大学附属図書館に所蔵されている「東京師範学校一覧 自明治十四年九月至同十七年九月」資料から窺うことができる。那須は、「雇教員」として英語を担当した。教えたのは、「初等中学師範学科第四級後期」と「同第三級前期」で、英語担当は那須一人であった。「東京師範学校一覧 自明治十七年九月至同十八年九月」には、那須が出題した英語の試験問題も所収されている。学生には人気が高く、「頗る人望を博し居りし」[35]存在だったという。しかし、那須の在職は短かった。在職期間は明治一七年（一八八四）五月九日から翌年の九月三日までで、わずか一年半弱だった。[36]そして、デポー大学の記録には、那須が明治一九年（一八八六）の一一月八日に亡くなったことが記されている。[37]

那須泉は、東奥義塾が海外の高等教育機関に接続したときの最初の留学生だった。もし、東京師範学校での教職がさらに続くと、高い英語力を身につけた那須の指導下からあらたな展開が生まれた可能性が十分に考えられる。きわめて惜しまれる早世だったのである。

（二八） 国内の高等教育機関に進学した人たち——木村牧の場合

東奥義塾で学び、さらに高等教育機関に進学した人たちは、もちろん海外に向かったケースばかりではなく、むしろ国内の学校に進学するケースの方が多かった。草創期の東奥義塾で学んだ人たちの進学先は明確な記録がないので、わからないことの方が多い。イングの指導を受けた伊東重のように、東奥義塾から東京大学に進み、医学を学ぶケースもあった。「福沢研究センター通信」一八号に柄越祥子氏によって紹介されている木村牧のケースも興味深いものである。木村牧は会津出身、珍田捨己の誘いで東奥義塾に来た。ちょうどイング在

職中であり、イングの指導を受けた木村は、明治一〇年（一八七七）に留学するメンバーとともにギリシャ語とラテン語も学んでいる。海外雄飛の夢を抱いており、またそれが可能なだけの語学力を持っていたものと思われる。しかし、費用を捻出できず、「恨を呑んで止めた」[38]。海外留学を断念した後の木村の足跡を、柄越氏の研究を基に少し辿ってみる[39]。明治一一年（一八七八）に東奥義塾を卒業し、そのまま教員兼塾監として東奥義塾に勤務した木村は、青森県南津軽郡黒石の公立中学校勤務を経て明治一四年（一八八一）一〇月に慶應義塾に入社し、翌一五年（一八八二）七月に卒業した。その後静岡での中学教員を経て、二二年（一八八九）に帝国大学の特約生教育学科に入学する。特約生は授業料免除に加えて、月額三〇円以内の給与金も与えられ、その額に応じて卒業後の服務規程があった。木村牧も文部省の指定により高等師範学校附属学校に勤務した。その後、島根県や長崎県、福島県、福井県、奈良県、最後は北海道と、各地を転々として教育に当たった。柄越氏によると、島根県の中学校在職中には、県に宛てて外国人教師を雇う進言を綴った原稿も残されているという。また、木村牧が一貫して英語教育に力を入れたことも柄越氏は指摘している。木村が慶應義塾の後に進学した帝国大学の特約生教育学科は、同学科の初代教師であった御雇ドイツ人教師エーミール・ハウスクネヒト[40]が担当した。入学試験問題もすべて英語で答案を書くことになっており、最初から高い英語力を求められていた。定員二〇名のうち、一三名が入学を許可されたものの、実際に入学したのは一〇名、さらに二週間後には三名以上の転学・退学者が出て、二ヶ月後には六名に減った[41]。ハウスクネヒトの研究を著した寺崎らは、その原因が語学力不足だろうと推察している[42]。

前述の通り、木村は東奥義塾においてイングから直接指導を受けた。そして、イングが母校に留学させようと、課外授業でギリシャ語やラテン語を教えたメンバーの一人でもあった。この時インディアナ・アズベリー

大学に進学した同期の珍田捨己や佐藤愛麿の活躍を見ると、木村牧の英語力もかなりのものであったことはほぼ間違いない。英語力を保つ為の努力を怠らなかったことに加えて、外国人教師雇用を県に進言するという発想自体に、東奥義塾で鍛えた英語教育の成果を見て取ることができると思われる。

結びにかえて

ここまで述べてきたように、東奥義塾にはその設立経緯や設立後の影響力において、幾つかの「接続」が存在した。近世型の藩学校から近代の学校への「接続」を可能にしたのは、その時期にあたかも寄り添うように東奥義塾教育に影響力を持った慶應義塾の存在だった。そして、慶應義塾出身の教師であった吉川泰次郎と成田五十穂の尽力で雇用した外国人教師の存在から、次の「接続」の可能性が始まった。ウォルフ、マックレー、イング、デヴィソン、カールと続く外国人教師の中で、イング以降の影響力が、東奥義塾からアメリカの高等教育機関への「接続」を可能にして行った。ここで開かれた道によりアメリカで学んだ人たちは、それぞれ日本の近代に貢献したが、中に那須泉のように、早世により実現はしなかったものの、日本の教育機関に就職して、次なる「接続」の可能性を持ち得た存在もいた。一方、木村牧のように、海外に進学する夢を断念した後、その力量を国内の教育機関で発揮した人物もいた。

学校とは、そこで学ぶ人間の次なるステップへの接続を可能にする。近世の藩校から海外高等教育機関を進学先とする学校へと変容した東奥義塾の存在は、文明開化期日本に存在した教育を巡る「接続」を考える上で、興味深いケースであると言えよう。

注

（1）「学校御引移り御用掛、御家老牧野佐次郎、総司津軽永孚、小司竹内衛士、以下一統へ御祝被下置候。学問所之号を稽古館と唱申候。此節入学生、凡三百人といふ」（「津軽歴代記類」、寛政八年六月二八日）。

（2）「弘前学問所（稽古館）内ニ蘭学堂ヲ設ケテ、蘭学ヲ研究スルノ道ヲ開キ、諸士及在町医師ノ子弟ヲ奨励シテ入学セシム」（『津軽承昭伝』安政六年二月二八日）。

（3）坂井達朗「幕末・明治初年の弘前藩と慶應義塾―「江戸日記」を史料として―」『近代日本研究』一〇巻（福沢研究センター、一九九三）。

（4）同上、二〇九頁。

（5）ここにあげた明治四年の弘前藩による学校設置に関しては、青森県から刊行された『青森県史』復刻版五巻（歴史図書社、一九七一）、『青森市沿革史 中巻』（青森市役所市史編纂係、一九〇九）、弘前藩十二代藩主の記録である『津軽承昭公伝』（津軽承昭公伝刊行会、一九七六）などがあげられる。本稿で記述した「敬応書院」「青森英学校」の校名や統合のいきさつは、『青森市沿革史』（五九三―五九六頁）記載による。また、坂本寿夫編『津軽近世史料7 弘前藩記事 五』（北方新社、一九九四）には、「弘前藩記録拾遺 六尾」（明治三年庚午従七月 同 四年辛未至十一月）が収録されており、三七三頁に「教師御雇入条約書」として、慶應義塾から雇われた永嶋貞次郎・吉川泰次郎の契約書が掲載されている。

（6）長谷川虎次郎『菊池九郎先生小伝』（菊池九郎先生建碑会、一九三五）二四頁。

（7）青森県『青森県史』復刻版五巻（歴史図書社、一九七一）、一四〇―一四一頁。

（8）「義塾取建之儀ニ付願」（一一月十七日付）。

（9）弘前漢英学校から東奥義塾への経過については、長谷川虎次郎『菊池九郎先生小伝』（菊池九郎先生建碑会、一九

三五）二二四頁―二二六頁参照のこと。

（10）「義塾取建之儀ニ付願」（一一月十七日付）。
この東奥義塾から県庁に提出された「義塾取建之儀ニ付願」及び、これを受けて県庁から大木文部卿宛てに提出された「義塾取建之儀ニ付願」〔一一月二〇日付〕は、現在共に東奥義塾所蔵資料となっている。

（11）『慶應義塾百年史』上巻（慶應義塾、一九五八）三三七―三五三頁。

（12）両者の比較検討については、拙著『洋学受容と地方の近代―津軽東奥義塾を中心に―』（岩田書院、二〇〇二）三〇―三七頁参照のこと。

（13）津軽承昭公伝刊行会『津軽承昭公伝』（歴史図書社、一九七六）三六一―三六二頁。

（14）河西英通氏は、明治一四年から一五年にかけておきた「弘前事件」において、東奥義塾が政府を巻き込む弾圧を受けた状況を明らかにするとともに、東奥義塾が私学であることを貫いたのは、「私立学校の主体性の確立としても、特筆に値する闘争であった」と評価している（河西英通『近代日本の地域思想』、窓社、一九九六、五五頁）。

（15）菊池九郎「官立公立中学校廃止論」『自由党党報』二五（一八九二、二〇―二二頁）、「官立公立中学校廃止論（承前）」『自由党党報』二七（一八九二、一五―一八頁）、菊池九郎「教育界の根本的革新（上）」『東奥日報』明治三三年三月一四日、「教育界の根本的革新（下）」『東奥日報』明治三三年三月一四日。なお、拙著『洋学受容と地方の近代―津軽東奥義塾を中心に―』（岩田書院、二〇〇二）二九頁参照のこと。

（16）明治五年（一八七二）に設立された東奥義塾と弘前藩藩校稽古館との、形式上の断絶と実質上の継続とのギャップを検討した論文としては、米山光儀「『日本教育史資料』所収東奥義塾関係資料に関する一考察」『慶應義塾大学教職課程センター年報』第八号、一九九六、一―一九頁参照のこと。

（17）Charles H. H. Wolff（1840―1919）東奥義塾在職期間は一八七三・一―一八七三・一二。なお、ウォルフの給料は月額二〇〇円、夫人の給料が五〇円で、年間三〇〇〇円にのぼった（前掲拙著、三八頁参照のこと）。

（18） In speaking however to M_____ Naritah and Yoshikawa about it they felt so bad and wished me so much to stay, that I have made up my mind to remain at least till next spring and Summer, in fact if they _ _ ? be willing to re-engage me for another year or even for a longer period, I would be willing to（___?）the same.（Wolff, C. H. H., “Letter to Ballagh, Aug. 18, 1873” 明治六年八月一八日付 Ballagh 宛て Wolff 書簡）横浜開港資料館所蔵資料、下線部は解読不可能個所。

（19） Certain Japanese officers namely of a large school this city were anxious to secure a teacher, they preferred a Christian man, if possible a missionary.（Wolff, C. H. H., “Letter to Ferris, March 26, 1873明治六年三月二六日付、Rev. Ferris 宛て Wolff 書簡）横浜開港資料館所蔵資料。なお、山本博「本多庸一と弘前バンド」（『「大学キリスト者」紀要』七号、一九八九、一二一―二九頁）参照。

（20） Arthur C. Maclay（1853-1930）東奥義塾在職期間は一八七四・四―一八七四・一一・一一。

（21） John Ing（1840-1920）東奥義塾在職期間は一八七四・一二―一八七八・三・七。

（22） The school is thoroughly organized on principles as nearly like our own as can well be, under existing circumstances. Foreign text-books on the sciences, history, etc., have been introduced into the Japanese department, while in the English, over which we have had the honor of presiding for almost three years, we use the same text-books as used in our academics and colleges at home.（*Fifty-nineth Annual Report of the missionary Society of the Methodist Episcopal church for the Year 1877*, January, 1878, pp.157-158. Ecumenical Library, The Interchurch Center, New York 所蔵資料）。

（23） 開学時のカリキュラムの比較については、前掲拙著三三―三七頁参照のこと。

（24） 明治一一年のカリキュラムや教科書についての東奥義塾とインディアナ・アズベリー大学との比較は、拙著八八―九三頁参照のこと。

（25） リテラティ・ソサエティ（Literary Society）と文学社会については、拙著第三章を参照のこと。

（26） 昭和六年（一九三一）に当時の東奥義塾塾長笹森順造によって編纂された『東奥義塾再興十年史』（東奥義塾学友

会発行、一九三一）の回顧録部分にこうした記述が見受けられる。

（27） *Annual Register of the Indiana Asbury University 1875-76*, p.64.

（28） 前掲拙著、第四章参照のこと。

（29） William C. Davisson（1848-1903）東奥義塾在職期間は一八七八・二・二六―一八七八・冬。

（30） A correspondence, in regard to instruction in Chinese and Japanese in the University by native teachers, has been taking place between Dr. Wiley and Rev. John Ing, A. M., class of '68, who has been at the head of the English Department of the Togo Gakko College, Niphon, Japan. The following interesting letter has just been received. The coming of the young men spoken of, will be an honor to the Institution and will be an opening to a new field of Mission work. Faculty, students and patrons express a willingness to receive them gladly and to furnish them books and aid them in various way. *The Asbury Review*, June 1876, pp.148-149.

（31） Robert Froyt Kerr（1850-1921） 東奥義塾在職期間は一八七九・六・一三―一八八〇・七・二八。

（32） *Sixty-First Annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the Year 1879*, January, 1880, p. 154.

（33） Memorandum of Events in the Life of Robt. F. Kerr デポー大学所蔵資料。

（34） 前掲拙著、第四章参照のこと。

（35） 岩川友太郎『二村居士の過去六十年　追想録及官歴』（岩川信夫、一九三五）七六頁。

（36） 筑波大学附属図書館、筑波大学関係資料室所蔵資料「東京師範学校一覧、明治一七年九月―一八年九月」人事課資料）。

（37） *General Catalogue of Delta Kappa Epsilon*, 1918, p.493.

（38） 木村牧「義塾に居りし昔と其後」（『東奥義塾再興十年史』回顧録、（東奥義塾学友会、一九三一）一三二頁。

（39）柄越祥子「明治期中等教員の軌跡―木村牧氏関係資料に関して（計一三八点）―」『福沢研究センター通信』第一八号（慶應義塾福沢研究センター、二〇一三）四頁。

（40）Emil Hausknecht, 1853-1927.

（41）以上は、寺崎昌男・竹中暉雄・榑松かほる『御雇教師ハウスクネヒトの研究』（東京大学出版会、一九九一）

（42）前掲寺崎、他『御雇教師ハウスクネヒトの研究』、六〇頁。